

新学習指導要領に基づいた吹奏楽部における楽器指導 ～カリキュラム・マネジメントとアクティブ・ラーニングによるクラリネット指導法～

Method of teaching a musical instrument in a school band based on New Course of Study

～ Method of the Clarinet by using Curriculum management and Active learning ～

井上幸子

INOUE Sachiko

キーワード：新学習指導要領、カリキュラム・マネジメント、アクティブ・ラーニング、PDCA

Keywords : New Course of Study, Curriculum management, Active learning, PDCA

平成 26 年 11 月、中央教育審議会は、これからの時代に相応しい学習指導要領の在り方について文部科学大臣からの諮問を受けた。これからの時代とは、生産年齢人口の現象、グローバル化の進展、技術革新による人工知能（AI）の飛躍的進化、社会構造や雇用環境の変化といった予測不可能な時代を指す。とりわけ人工知能の発展は、これまでの進化段階から格段に進歩し、今や、知識の理解はもとより、思考をともなう段階に至ると言われている。

しかしながら、このことはかえってこの先の将来、人工知能がいくら発展しようが、人間の持つ思考力・判断力・表現力には遠くおよぼず、我々人類だけが感じることのできる、ものの正しさ、美しさへの判断、そして様々な感情を持つ心までは、機械では到底具現できないものであり、それが人間の強みであるということへの再認識につながっている。

静岡県教育委員会は、時期を合わせるかのように、平成 29 年 9 月に「静岡市立中学校部活動ガイドライン（案）」を全国に先駆けて発表した。同ガイドラインの「4. 部活動の活動日等について」の「（1）活動日」の「ア 常時活動」で、平日は週 3 日、週休日は土曜日または日曜日のどちらか一日とすると明確に謳われたことにより、報道の方向性やマスメディア上の議論では活動日の限定化に主眼が集まっているが、同時に発表された「6. 部活動の指導者について」の「（2）部活動指導員（外部人材）の任用と配置」と「（3）部活動指導員の資格等について」の「ア 外部顧問」について定義された校内指導者（以下、教員）と部活動指導員（以下、外部人材）の育成方針についても、同様に注視されるべき画期的な提議であり、外部人材への研修制度とライセンス付与とその更新制度は、これからの部活動変革において有用策であると感じる。吹奏楽部を例にすると、ある楽器を指導する外部人材は、子供たちの楽器技術や音楽表現だけを導くのではなく、学校教育現場に身を置き音楽教育者として人間形成段階の子供たちを相手にしている自覚を持ち、人間力の育成に繋がる指導も意識する必要がある。

ここでは、どちらも平成 30 年度より措置機関となる中学校新学習指導要領と静岡市教育委員会の部活動ガイドライン（案）の共通性に着目し、吹奏楽部における外部人材が、部活動指導にどのように国家指針を取り入れていくことが可能かの例を、クラリネット指導を通して挙げてみたい。

1. 新学習指導要領と静岡市教育委員会部活動ガイドライン案

1.1 新学習指導要領（中学校）

中央教育審議会は、2 年 1 ヶ月にわたる審議の末、平成 28 年 12 月 21 日に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）」を示した。中学校学習指導要領解説（平成 29 年 7 月 文部科学省 p.2）では、「中央教育審議会答申においては、“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、学習指導要領が、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」として役割を果たすことができるよう、次の 6 点にわたってその枠組みを改善するとともに、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことが求められた」と定義している。

「カリキュラム・マネジメント」の 6 点とは、以下のものを指す。

- 1) 「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）
- 2) 「何を学ぶか」（教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）
- 3) 「どのように学ぶか」（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実）
- 4) 「子供一人一人に発達をどのように支援するか」（子供の発達を踏まえた指導）
- 5) 「何が身に付いたか」（学習評価の充実）
- 6) 「実施するために何が必要か」（学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策）

いわゆる PDCA サイクルをより明確に細分化し段階付けした形ともいえるが、この好循環を教員も外部人材も常に念頭に置くことが、より求められよう。

中学校学習指導要領は、平成 30 年 4 月 1 日から移行措置を実施し、平成 33 年 4 月 1 日から全面实施することとなる。

1.2 静岡市教育委員会部活動ガイドライン案

静岡市教育委員会は、時期を合わせるかのように、平成 29 年 9 月に「静岡市立中学校部活動ガイドライン（案）」を全国に先駆けて発表した。趣旨として、部活動は静岡市の目指す「たくましく しなやかな子どもたち」を育成し、人間形成のための魅力ある教育活動であるとしながらも、連日の長時間にわたる活動が、生徒と教師の両方へ十分な休養をもたらしていないことと、顧問の約半数が未経験の種目を担当せざるを得ずにいることから来る指導への自信が持てないこと等を改善すべき課題としてあげている。ガイドラインの周知期間を平成 29 年度内とし、平成 30 年度から 1 年半の経過措置期間として実施する。

また、同ガイドライン（案）内では、「いきいき 3 視点」として、以下の視点を挙げている。

- 1) 「主体性」を養う：目標（課題）を見つけ、実現に向けて創意工夫して取り組む。

- 2) 「可能性」を伸ばす：各種目の醍醐味を味わい、体力・技術・表現等の向上により、生涯スポーツ・生涯学習の素地を養う。
- 3) 「社会性」を育成する（「小中一貫教育の基本的な考え方」）：学年を超えた連帯感、様々な人や集団と繋がる力を育む。

1.3 共通点

新学習指導要領の改訂の基本的な考え方は、1) 子供たちが未来社会を自らの力で切り拓く資質・能力を社会と連携して確実に育成し、これまでの学習指導要領でも重視されてきた、自らの力で切り拓き、生きて働くことができるようになるための「知識及び技能の習得」を目指すことと、2) 急速かつ未知の社会状況変化にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」の育成のバランスを維持した上で、さらに知識の理解の質を高め、確かな学力を育成することと、3) 豊かな心や健やかな体を育成し「学びに向かう力・人間性等」の涵養をすることである。予測困難な未来社会に対して、感性を豊かに働かせながら主体的に関わり、自ら目的を考え可能性を発揮するような創り手となる力、すなわちこれらを「生きる力」と定義し身につけさせることが改めて重要であると捉え直し、学校教育こそがその強みを発揮できる場であり、その理念を学校が社会と共有することがより求められている。

具体的な授業改善では、座学中心ではなく、より「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」の視点に立った授業改善を推進することが求められた。そのためには、カリキュラム・マネジメントの充実、生徒の発達支援のために、家庭や地域との連携協働を重視することが必要とされる。

静岡市教育委員会の部活動ガイドライン案でもまた、主体性に主眼を置き、確かな体力・技術・表現を身につけ、人と社会と繋がる力の育成を謳っている。国の指針に基づいての市の教育方針であるから柱が共通していることは当然のことではあるが、教員だけでなく子供たちに関わる外部人材も、何が現代の学校教育の柱なのかに関心を持ち把握することは必要である。

2. カリキュラム・マネジメントに基づいた吹奏楽部における楽器指導

2.1 若手指導者への指針作成の必要性

吹奏楽部における楽器指導において、確かな教育と研修を受けた外部人材への需要が高まりを見せていくことは、静岡市教育委員会の部活動ガイドライン案にも明記されたことも一例となり、今後もこれに倣う地域は増えていくであろう。音楽大学や音楽専門学校では、これまでの演奏技術や吹奏楽知識の教育だけではなく、国の方針に基づいた外部人材育成は急務といえる。筆者が受け持つ担当講義の一つである「吹奏楽指導法」の中で実際に学生たちの指導法と接して感じることは、中学生を目の前にして、楽器技術についての課題や伝えたいことは脳内に明確に浮かびあがっているのだが、その順序立てがわからないということや、対象者の個々の段階に合わせた臨機応変な指導が難しいといった声をよく耳にする。これらを解決する方策の一つとして、明確な「学びの地図」を持たせることができれば、彼らが既に得ている知識と技能を自らの力で整理し、段階に応じた教育手立てを作成することが可能になるのではないか、またカリキュラム・マネジメントを立てることで、指導者が常に脳内でPDCAの好循環を巡らせることができるようになれば、指導の本質と子供たちを導くべ

き方向性を見失うことなく教育する一助になると考えた。

2.2 カリキュラム・マネジメントに基づいた指導カード

指導案を作成することも考えたが、現場での臨機応変な対応を可能にするためには、常にシンプルに指導者の脳内が整理されている必要があると考え、項目を箇条書きできる「指導カード」という形態にし、6つのカリキュラム・マネジメントを項目順にPDCAサイクルにあてはめ、教師の働きかけと期待する生徒像、場面に応じて「生きる力」の要素を確認するための「生きる力チェック」という項目を立てた。

手順	カリキュラム・マネジメント	◎教師の働きかけ ☆期待する生徒像	「生きる力」 チェック
1	何を学ぶか (Plan)		
2	実施するために何が必要か (Plan)		
3	どのように学ぶか (Do)		
4	どのように支援するか (Do)		
5	何ができるようになったか (Check)		
6	何が身に付いたか (Act)		

(Table 1 : Curriculum management card)

2.3 カリキュラム・マネジメント指導カード記入例

ここでは、筆者がクラリネット基礎指導で挙げている主な6項目について記入例を挙げる。

- 1) 正しいリードの使い方
- 2) 正しいアンブシュア（口の形）と構え方
- 3) 正しい舌の位置
- 4) 正しいのどの使い方
- 5) 正しい息の使い方
- 6) 正しい発音の仕方

2.3.1「正しいリードの使い方」

手順	カリキュラム・マネジメント	◎教師の働きかけ ☆期待する生徒像	「生きる力」 チェック
1	何を学ぶか (Plan) 正しいリードの使い方	◎項目の板書 ☆項目のノートテイキング	
2	実施するために何が必要か (Plan) マウスピース、紙のリード	◎紙リードの作成指示 ☆用紙の用意	・思考力：どのように紙リードを作成するか
3	どのように学ぶか (Do) 紙リードが振動する様子を実際に目で見て確認させる	◎紙リードを振動させてみせる ☆視覚で振動を確かめる	・学びに向かう力
4	どのように支援するか (Do) 紙リードを押さえる親指位置の工夫	◎紙リードを上手に振動させるために親指の位置を工夫させる ☆紙リードを振動させるために、親指が何の役割をしているか知る	・判断力：紙リードの効率的な振動 ・知識
5	何が身に付いたか (Check) リードを正しく振動させるための息の当て方と、振動が開始する方向の理解	◎リードに対する息の当て方と振動開始方向を理解させる ☆リードを正しく振動させるための息の当て方があることを知る	・表現力：紙のリードを振動させることができる ・知識
6	何ができるようになったか (Act) 正しくリードを振動させることができるようになる	◎リード振動を意識して音を出すことを指示 ☆リードの振動をイメージして音を出すことができるようになる	・技能

(Table 2 : Curriculum management card “How to use a clarinet reed”)

2.3.2「正しいアンブシュア（口の形）と楽器の構え方」

手順	カリキュラム・マネジメント	◎教師の働きかけ ☆期待する生徒像	「生きる力」 チェック
1	何を学ぶか (Plan) 正しいアンブシュア（口の形）と楽器の構え方	◎項目の板書 ☆項目のノートテイキング	
2	実施するために何が必要か (Plan) 楽器、鏡	◎鏡の用意を指示 ☆鏡を用意する	
3	どのように学ぶか (Do) 楽器を口元に運ぶまでの正しい手順とそれを支えるために必要な知識（唇、歯、表情筋について）を得る	◎楽器の構え方がアンブシュアに与える影響を説明し、正しく楽器を構える必要性を伝える ☆楽器の構え方を重要と考える	・思考力：どのように楽器を口元に運ぶことが最適か

4	どのように支援するか (Do) 楽器を持ち続けられるようになるために、腕力や表情筋を鍛えるためのトレーニング法の紹介	◎楽器の重みでアンブシュアが負けてしまわないような支えを意識させる ☆アンブシュアを保つために楽器を正しく構える	・判断力：アンブシュアを保ち続けるために、どこの部位の力が必要か ・知識
5	何が身に付いたか (Check) アンブシュアを正しく保つための構えと、意識するステップ	◎正しい時との音の違いを示す ☆正しく楽器を構えることの重要性を耳で知る	・学びに向かう力
6	何ができるようになったか (Act) 正しく楽器を構え、正しいアンブシュアを保ちながら演奏することができる	◎正しい楽器の構えとアンブシュアの関係性と重要性についてまとめ ☆正しい構えを心がける	・表現力：正しい構えて音が伸ばせるようになる ・技能

(Table 3 : Curriculum management card “How to develop embouchure on clarinet”)

2.3.3 「正しい舌の位置」

手順	カリキュラム・マネジメント	◎教師の働きかけ ☆期待する生徒像	「生きる力」 チェック
1	何を学ぶか (Plan) 正しい舌の位置	◎項目の板書 ☆項目のノートテイキング	
2	実施するために何が必要か (Plan) 楽器、口笛、(ファイフ)	◎口笛が吹けるかの問いかけ ☆口笛に挑戦する	
3	どのように学ぶか (Do) 正しい舌の位置の理解のために、口笛を吹けるようになる	◎口笛が鳴る仕組みを伝える ☆口笛が鳴る仕組みへの理解	・思考力：どうして口笛は鳴るのか ・学びに向かう力
4	どのように支援するか (Do) 口笛を吹いている時の舌の位置と上顎奥歯との位置関係を見つけ、なぜその位置になった時に音が鳴るのかを導く	◎口笛の練習支援 ☆口笛が鳴る仕組みを理解して、挑戦する	・判断力：口笛に最適な舌の位置を見つけることができる
5	何が身に付いたか (Check) 口笛が鳴る時の舌と歯の位置関係と、その必要性の理解	◎息の通り道を舌の位置で狭くすることによって、息圧が口腔で発生する仕組みの説明 ☆舌の位置の重要性を理解	・表現力：口笛を吹くことができる ・知識

6	何ができるようになったか (Act) 口笛を吹いている時の舌の位置をイメージして保ちながら、息を効率良く楽器へ送ることができるようになる	◎息を効率良く楽器へ運び、リードを正しく振動させるためには、口腔での舌の位置が大切であることを伝える ☆舌の位置を調整して息をまとめることができるようになる	・技能
---	---	---	-----

(Table 4 : Curriculum management card “Position of the tongue”)

2.3.4 「正しいのどの使い方」

手順	カリキュラム・マネジメント	◎教師の働きかけ ☆期待する生徒像	「生きる力」 チェック
1	何を学ぶか (Plan) 正しいのどの使い方	◎項目の板書 ☆項目のノートテイキング	
2	実施するために何が必要か (Plan) 楽器	◎楽器本体の準備指示 ☆楽器本体の準備	
3	どのように学ぶか (Do) 息の通り道を確保し、無理なくリードの振動を促す為の練習方法として、声を出しながら音が出せるようになる	◎声を出しながら音が出せる必要性の説明と方法の提示 ☆声と音が同時になるのかどうかへの興味・関心	・思考力：声と音は同時に鳴るのか
4	どのように支援するか (Do) 声を出しながら音を出すことを妨げているリードを装着していないかなど、道具による原因察知	◎声を出しながら音を出すことの練習指示と巡視支援 ☆声を出しながら音を出すことへの挑戦	・学びに向かう力
5	何が身に付いたか (Check) 声と音を同時にさせる時のポジションが、正しく自然に身体機能を使えているときであることへの理解	◎声と音を同時に鳴らし、やがて音だけに変えて行く ☆声と音を同時に鳴るポジションを記憶し、音だけに行うことができる	・判断力：声と音が同時に鳴るポジションを見つけることができる
6	何ができるようになったか (Act) 日常生活で声を出す際に自然に行っている息の流れを意識して、音が出せるようになる	◎自分の身体機能を効率良く使い、リードの振動を開始させることが大切であることを伝える ☆無理のないリード選びと、振動が開始する瞬間を体感し、のどの役割の重要性を理解する	・表現力：声と音を同時に鳴らすことができるポジションを習得して、自然な息の流れを意識して音が出せるようになる ・技能

(Table 5 : Curriculum management card “How to use the throat”)

2.3.5 「正しい息の使い方」

手順	カリキュラム・マネジメント	◎教師の働きかけ ☆期待する生徒像	「生きる力」 チェック
1	何を学ぶか (Plan) 正しい息の使い方	◎項目の板書 ☆項目のノートテイキング	
2	実施するために何が必要か (Plan) 楽器、ペン（花のイメージ用）	◎楽器本体の準備を指示 ☆楽器本体を準備する	
3	どのように学ぶか (Do) 腹式呼吸と胸式呼吸の違いを理解させ、腹式呼吸の必要性を知る	◎身体のどこに息が入るかの問いかけのあと、花の匂いを嗅ぐ時の動作を確認 ☆日常生活の呼吸への関心	・思考力：吸った息は、身体のどこに入るか ・学びに向かう力 ・知識
4	どのように支援するか (Do) 日常生活で使っている息の量から、管楽器奏法に必要な息にまで成長させるためのトレーニング方法の紹介	◎息を吐ききる練習を提示 ☆息を吸う前に、全て吐ききることの重要性の理解	・判断力：息をどこまで吐き、どのくらい吸うことができるか
5	何が身に付いたか (Check) 管楽器奏法に必要な息の量がどのくらいかを吐ききる息の体験を通して知る	◎息を吐ききる事がフレーズ意識に繋がることを伝える ☆息を吐ききるようになる	
6	何ができるようになったか (Act) 腹式呼吸による楽器演奏	◎楽器を吹く時には、腹式呼吸が有用である説明 ☆呼吸の種類を知り、管楽器奏法に適した呼吸法で演奏できるようになる	・表現力：腹筋力を意識した呼吸法で演奏することができる ・技能

(Table 6 : Curriculum management card “How to blow into the clarinet”)

2.3.6 「正しい発音の仕方」

手順	カリキュラム・マネジメント	◎教師の働きかけ ☆期待する生徒像	「生きる力」 チェック
1	何を学ぶか (Plan) 正しい発音の仕方	◎項目の板書 ☆項目のノートテイキング	
2	実施するために何が必要か (Plan) マウスピース、鏡	◎マウスピースのみの準備指示 ☆楽器からマウスピース部分のみをはずして用意する	
3	どのように学ぶか (Do) 歯と舌だけで練習した後に、同じことをマウスピース部分のみで試し、その時に発せられる音形を認識することで、自分の発音の癖を直す	◎上下の歯をしっかりと閉じ、舌を歯の裏につけた状態で息を前に流し、息の流れを止めずに舌だけを手前に放すように伝える ☆発音時の舌の動きを習得する	・思考力：発音時の舌の動きと息の流れとの関係を考える ・知識

4	<p>どのように支援するか (Do)</p> <p>発音時に顎と一緒に動いて見えることがあるが、下の歯が舌と連動して一緒に手前に動いてしまうからであるので、このことを防ぐために、舌だけを動かせるようになるための支援する</p>	<p>◎舌と歯と唇が連動してしまう場合は、舌だけを手前に動かせるようになること重要と伝える</p> <p>☆鏡を用いて、自分の舌と歯と唇の関係を視覚理解し、原因を探し直そうとする</p>	<p>・判断力：舌と歯と唇が連動しない時の感覚を記憶し、技として習得する</p> <p>・学びへ向かう力</p> <p>・技能</p>
5	<p>何が身に付いたか (Check)</p> <p>音型の名称（アタック、コア、リリース）についての知識を得て、正しく音の型を生み出すために、正しい発音を習得する必要があることを理解する</p>	<p>◎音の型についてと、アタック、コア、リリースの名称説明をし、発音の重要性を伝える</p> <p>☆正しく音の型を生み出すために、正しい発音を習得する必要性を理解する</p>	<p>・学びへ向かう力</p> <p>・知識</p>
6	<p>何ができるようになったか (Act)</p> <p>腹筋を使って息圧を保った状態から、舌だけを手前に解き放ち、発音時から正しく良い音の型を作れるようになる</p>	<p>◎正しく発音するには、舌だけを解き放つための強いアンブシュアと腹筋力の必要性を伝える</p> <p>☆口元だけでは良い発音を作れないことを理解し、正しい発音を習得する</p>	<p>・表現力：正しい発音を習得し、良い音の型を作れるようになる</p> <p>・技能</p>

(Table 7 : Curriculum management card “How to use the tongue on the clarinet”)

2.4 アクティブ・ラーニング導入例

得た知識を確実な技能へと導くためには、子供たちに主体的・対話的に考えさせ、深い学びへと発展させることが重要である（アクティブ・ラーニング）。特に外部人材は、子供たちの側で指導内容の定着を日々確認できる立場にいない場合が多いため、知識や技能が確実に子供たちの中に定着するような練習課題を提示してることが重要であるとともに、子供たちが日常の部活動において、自らの力で「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」を実行できるようにも教育してることが重要である。

クラリネット指導を例にすると、6項目についての基礎的な学びを終えた時点で、黒板には学んだ項目と、日々意識すべき事柄がキーワードとともに、順序立てて書かれているようにすることが大切である。そのためには、予め板書計画を立てておく必要がある。

<p>(板書計画)</p> <p>今日勉強すること「正しいクラリネット（バスクラリネット）の吹き方」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 正しいリードの使い方：息は内側から 2) 正しいアンブシュア（口の形）と楽器の構え方：腕と表情筋 3) 正しい舌の位置：舌＝橋 4) 正しいのどの使い方：声＋音 5) 正しい息の使い方：腹式呼吸、花の匂いを嗅ぐ時のイメージ 6) 正しい発音の仕方：タンギング＝はなす ×つく
--

(Table 8 : Plan for writing on the blackboard)

それぞれのカリキュラム・マネジメントの 6 番目は、「何ができるようになったか」の知識・技能についての自己評価項目であり、また PDCA サイクルの「Act (改善)」にもあたる。各項目の評価と改善を繰り返す際に、アクティブ・ラーニングを導入する方法としては以下のような手順が例として挙げられる。

	PDCA	流れ	生きる力	活動形態
1	Plan	奏法上大切なこと(知識・技能)を意識しながらでもできるような、簡単な課題を提示。 (例) ハ長調の音階ロングトーン(♩=60。1オクターブ。1音につき8拍)など。	学びに向かう力	個人(主体)
2	Do	1項目を10点とし6項目で60点満点。どの項目ができているか、または、どの項目なら挑戦できるかを、黒板を見ながら考え実行する。	思考力	個人(主体)
3	Check	何ができただか振り返り、自己採点をする。	判断力	個人(主体)
4	Act	自分の点数、できた項目、できていない項目を発表する。	表現力	一斉(対話)
5	P→D→C→A	次の目標点と克服したい課題を決める。一つの課題につき、このサイクルを数回繰り返す。	知識・技能の定着	個人(主体)

(Table 9 : PDCA cycle of clarinet teaching)

終わりに

吹奏楽部の楽器指導において、実りの多い指導活動を実現するには、子供たちに「今、自分は何を学んでいるか」を明確に考えさせることが重要である。自己の力で主体的・対話的に思考し、判断し、表現させることが深い学びへとひろがり、「生きる力」の育成につながる。またこのことは、「自分が考えていることについて考える(thinking about thinking)」メタ認知プロセスにも通ずる考え方でもある。

子供たちにこれらの認知プロセスを癖づけるためには、指導者が明確なカリキュラム・マネジメントを持ち、知識と技能の定着にアクティブ・ラーニングを用いながら導くスキルを手にすることがその方策となる。

これからの外部人材に求められることは、高い楽器演奏能力や音楽表現力はもちろんのこと、思考と言語を高度に操るコミュニケーションスキルを持ち、優れた創造性と高い問題解決能力、また、学校教育機関で子供たちに接しているという教育者としての自覚を持ち併せ、国の教育方針に無関心でいることなく、自分も社会の一員として学校教育に協働していく姿勢で未来の子供たちの情操教育に携わることであり、音楽大学や音楽専門学校では、これらの指導スキルと自覚を持った外部人材育成と輩出がより求められる。

引用・参考文献

文部科学省 (2017). 中学校学習指導要領解説 第1章 総則編 (p.3-13), 第2章 第5節 音楽 (p.84-91), 文部科学省

文部科学省 教育課程部会、総則評価特別部会 (2016). アクティブ・ラーニングの視点と資質・能力に関する参考資料 2-2 (p.2-18), 文部科学省

静岡市教育委員会 (2017). 静岡市立中学校部活動ガイドライン (案) (p.1-16), 静岡市教育委員会

高木展郎 (2016). VIEW21 Vol.4 第1特集「今から考えるカリキュラム・マネジメント」 (p.1-14), ベネッセ教育総合研究所 教育委員会版

カリキュラム・マネジメント推進プロジェクトチーム(2016). 新しい時代に求められる資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメント (p.1-4), 新潟県立教育センター

